



Title	子ども臨床研究部門
Citation	子ども発達臨床研究, 15, 83-84
Issue Date	2021-03-25
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/80834
Type	bulletin (other)
File Information	090-1882-1707-15.pdf



[Instructions for use](#)

子ども臨床研究部門

1. セミナー及び研究会

「臨床と研究のための交流会」については、新型コロナウイルス感染拡大のため、異なる教育・臨床現場の参加者が集まって議論することは困難であることから、今年度の活動は中止とした。

その他の子どもの心理臨床や特別支援教育に関わる講習会、ワークショップ、シンポジウムについても今年度は実施できなかった。

2. ディスレクシア支援室

本支援室での相談・支援活動は、医療機関等で既に診断を受けている事例を対象とし、研究協力への同意の下に行っている。心理学的諸検査を実施し、その結果に基づいて心理・教育的な指導方法の提案・実施を行う。これまで関あゆみと研究室の博士課程院生が主体となり、学外研究員（室橋春光・橋本竜作）の協力を得て運営してきたが、今年度より公認心理師受験資格のための実習施設となったため、臨床心理講座の実習生1名が参加した。

新型コロナウイルス感染拡大のため、対応を急ぐ必要があった1例を除き、3月より対面での評価・支援を中止した。5月よりオンラインの保護者面談を実施、7月より対面での評価・支援を再開した。ただし、継続的な活動が見通せなかったため個別の指導計画に基づく支援は難しく、評価と保護者面談を中心に行わざるを得なかった。11月より中学進学のために対応を急ぐ必要のある事例を除き、再びオンラインとした。例年行ってきたディスレクシア合宿についても中止をせざるを得なかった。本年度の参加者（研究協力者）は小学1年生から中学生までの10名（新規4名／再来6名）、支援・相談回数はのべ43回（1月末時点）であった。なお、院生や支援者の研修としても位置付けており、例年であれば「障害・臨床心理学総合講義（学習障害）」の受講者も参加するが、今年度はカンファレンス（事例検討）のみの参加とした。受講者数は前期3名、後期5名であった。

オンラインによる支援は保護者と分離した状況で子どもと関わるのが難しいため、保護者に対する面談が主体となった。この場合も、家庭内で子どもに話を聞かれない面談環境を用意することが困難な場合があった。オンラインによる支援は来談の困難な事例に対する支援方略となりうる可能性があるが、今年度の経験を通し障壁も多いことが明らかとなった。

3. RTIモデルを用いたひらがな音読支援

江別市教育委員会（4小学校）、士別市教育委員会（2小学校）と連携し、「T式ひらがな音読支援」による支援を行った。この支援法では、在籍する全ての1年生を対象として学期ごとにひらがな音読能力を評価し、その結果に基づいて短時間の読み練習を行う。さらに支援が必要な児童には2年時に週1回の個別指導を行う。

今年度は、小学校を訪問しての検査実施の補助や助言が困難であったため、学期毎の評価と読み練習・個別支援は各学校の教員が中心となって行い、大学側では学校から受け取った検査結果の評価・分析のみを行った。4～5月が休校となり例年どおりの評価・支援が困難であったが、各校が実施時期を調整して取り組み、中止とした学校はなかった。また、ひらがな音読の練習を休校中に家庭で取り組めるよう工夫した学校もあった。

現在、各校の結果を分析中であり、昨年度までの比較を行い、実施時期の違いやコロナ禍の影響について検討を行う。

4. 高機能広汎性発達障害の子ども・青年・成人の本人活動

新型コロナウイルス感染が拡大し、当該状況が継続していたため、多人数がセンターホールで行う活動が中心となる本人活動は第1回から中止となり、その後、再開することができなかった。そのため、併せて活動していた高機能広汎性発達障害の子どもを育てる親部会も中止となった。

5. ASD 幼児の集団支援活動

今年度から開始を計画した活動であり、学外研究院の佐藤徹男氏（札幌国際大学）と臨床心理学講座の安達を中心として、DC 在籍院生の萬谷きみ子、加えて、参加希望院生 5 名で活動を行ってきた。当初は、ASD 幼児数名をリクルートして、センターにて集団形態の発達支援活動を展開する予定であったが、コロナ感染が拡大し、当該状況が継続していたため、集団活動実施に向けたオンラインによるミーティングを毎週行い、令和 3 年の 2 月末までに 21 回のミーティングを行った。また経過の中で、支援対象児 1 名の協力が得られることとなり、在籍幼稚園の訪問、当該幼稚園の園長先生への計画説明、当該時の保護者との面談を行った。ミーティングの中では、集団幼児支援の基本的な

考え方の確認を行うとともに、佐藤氏による ADOS-2 の実演ビデオ（対象児はおらず実施の様子のみ）による ASD 幼児の特徴確認、また在籍幼稚園での対象時の様子を撮影したビデオを視聴しながら対象児の困難さを確認する作業を行った。在籍幼稚園の訪問では、当該児の様子を実際に観察し、その結果をオンラインによるミーティングで話し合うことを通じて、支援活動の内容を計画した。今後、本活動に参加している DC 院生が訪問支援者として実施する保育所等訪問支援に併せて、センタープロジェクトとしての支援活動を在籍幼稚園で実施していくとともに、両親の相談を受ける機会を設け、条件が整えば、オンラインによる発達支援・子育て支援を保護者に対して提供していく活動への展開を検討している。